



ガン博士

論を再開する。イオンの垂直分布のデータをただすと早速別室に行って大きな机のうえ一杯に自記紙をまき戻して並べてみせるといったピストン式のやりかたで研究所を一応見学したことになった。こういうやり方は如何にも精力的で少し捲舌なところなど黒田正夫先生を思わせる人であった。

一応議論が終わってからワシントンのその晩のホテルの予約をお願いしたら、隣室の秘書嬢に大声で命令する。秘書が4軒ばかりあたってくれたが何処も満員でことわられてしまった。博士は気毒そうに「時期が悪い。ワシントンは桜のシーズンだ。俺の力ではどうにもならないから近くにある日本大使館で助力を求めたがよい」と大使館の受付まで車で案内してくれた。

### バイヤース教授

シカゴで小元君に会ったら、私あての手紙が何本もバイヤース教授のところに着いているが本人が何時来るの

かわからないでこまっけていられるとの話があったとのことであった。随分気をつけて手紙を出していたのだが最後は電話でなければうまくないらしい。長距離電話は私の英語にとって最も苦手であった。

あってみると非常にもの静かな鼻すじの通った品のよい老人で、ときばきたシカゴ大学中堅のスタッフとはよい対照であった。教授は気象学教室の長と、教室内の雲物理学研究室の長も兼ねておられるので両方に居室をもっておられる。教室本館の方の居室で気象学教室の最近の活動ぶりを拝聴したが、ゆっくりした講義口調なのでわかりがよかった。雨滴の成長に coagulation の効果を非常に重くみておられるようである。少し度が過ぎていのように思えるので納得しかねるような素振りを示したら電場内における水滴の coagulation の16ミリ映画をみせて下さった。なるほどよく合体するのがわかるが画面はあまり奇麗でなかった。あとで別館の雲物理研究室を案内して頂いた。別館の方が立派である。主として航空機搭載用の気象学器械とくに大気中の含水量の測定に重点をおいているらしく雲粒の直接測定、電気抵抗式及び露点式の3通りの方法を併用していた。一方法だけであらゆる霧粒をつかまえることは出来ないそうである。空軍研究所のアトラス博士は「飛行機は整備とか何とかいって使いにくいから使わないことにしている」とこぼしていたがシカゴ大学ではうまく行っているらしい。午後雲物理学関係者だけの集りで最近の日本の雲物理学の進歩と題して講演した。

例によってスライドに頼ったが用意が不充分でよく通じなかったかも知れない。

翌日の夕食は藤田博士の宅で日本料理を御馳走になった。バイヤース教授夫妻、東島博士夫妻、あとで小元君も加わって大変にぎやかであった。教授はとくに話されるわけではなく、ただ日本人の英語を楽しそうに聞いておられるだけである。日本料理がバイヤース夫妻の出席された条件であり目的でもあったそうである。

### 一紹介

#### 地球と宇宙

島村 福太郎 編 理論社 1957年9月刊  
286頁, 320円

内容は3つの部門, "日本をとりまく気象", "地球と日本列島" "宇宙のしくみ"に分かれており, 気象については気象研究所衛生気象研究室長の神山恵三氏, 日本列島については東京教育大学助教授の大森昌衛氏, 宇宙については東京学芸大学助教授の島村福太郎氏がそれぞれ執筆している。

"日本をとりまく気象"では日本における1年間の季節の移り変りを代表的な気象現象を通して述べている。この書き方は目新しいものではないが、従来の本と全く趣

の変わった新鮮味があるのは、氏の専門的研究を生かして気象現象をわれわれの身体や生活に対する影響にまで掘り下げて述べてあるからである。気象と生活とを結びつけることにこれほど成功したものはないだろう。

"地球と日本列島"では地震、火山、地下資源、海洋を生活に関連させて興味深く書き、最後に地球の歴史を述べて結んでいる。

"宇宙のしくみ"では"人類の生活が変るにつれて世界観がどのように進んで来たかを述べた後、現代の新しい宇宙観が明確な筆で描かれている。

本書全体を通じて、科学をわかって貰おうという筆者の親切さがにじみ出ており、ごく最近の知識までが、わかり易い筆致で与えられている。(有住直介)